双葉郡教育復興ビジョン推進協議会としての情報発信について

資料 10

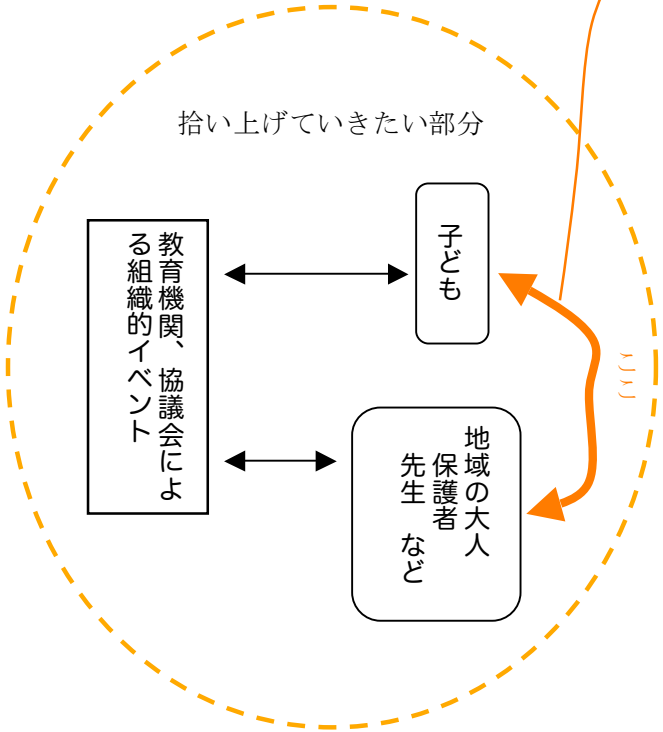
● 既にある発信の方向性と、ホームページで試みたい発信

社会的なまなざしを意識した発信

・ 各種会議、イベントの開催とその意義
・ 子どもの大会出場、留学など教育の社会的成果

必要性
　地域の活性化のために、尊厳の回復のために
　個人の活動力回復のために

発信方法
　自治体や学校発信、報道により拡散中…



地域人にとって等身大の発信

・ 学校現場で過ごす子どもと教員の日常の姿（子どもの思い、教員の思い、親の思い）

・ 地域の人の日常の姿（地域学的語り）

必要性
　現状を前向きに受け入れていくために
　それぞれの人のそれぞれの生き方を肯定するために
　↓
　子どもの「じぶんづくり」のフォロー
　大人の基本的な自尊心回復のフォロー

発信方法
　「既にあるが、価値化されていない要素」を拾い上げ、画像で可視化、言語化する。

試みの意味
・ ふるさとのルーツにこだわりながら日常を生きる人間的姿勢の社会的な価値化
・ 実務レベルの地域アイデンティティの創造　・ 学術レベルのふるさと創造学の体現（「ふるさと創造学」テキストと接続させていく）

●発信の問題意識

・ 困難な状況にあるとき、人間は社会的評価に囚われて自分を見失ってしまいやすい。地域の方たちが新しい道に踏み出していくためには、今の等身大の生き方が社会的に認められていると感じていくことが必要ではないか。

・「地域の活性化」の観点では、社会的な戦略は非常に重要。しかし教育や人間生活の観点においては、社会的なまなざしにチャンネルを限定してしまうと、根本的な生活的満足や自尊心の回復につながっていかない。時間はかかるが長期的な見通しで、地域の人（子ども、保護者、教師など）の人間的な部分にフォーカスして、地道で前向きな発信をコーディネートしていくことが、地域アイデンティティの回復と新しい価値観創造の支えになるだろう。

●想定するデザインイメージ

・ ほっこり感、親しみやすさ。

・ 地元の良いところ（風景、文化、人の温かさ）にフォーカスしつつ、洗練し過ぎないように、「今の苦しさ」もやわらかく表現する。

・「協議会」として決定事項を発信する媒体であることを前面に出すと、威圧的で固い印象を与えやすいので、「協議会」とは別のタイトルをつけたらどうか（例えば「ふるさとのふたば」…など。地域内外の多くの人にわかりやすく、印象のやわらかい言葉で）。

●ホームページ全体の構造

「等身大の発信」イメージをベースに、

・ トピックとして会議等イベント情報を提示。

・ 日常的な取材による短い記事のブログ発信。

・ 協議会関係の基本情報ページを独立させて明確に提示。

●可視化、言語化の姿勢

・ 地域の人に寄り添う姿勢で。特別な取り組みの価値とは別の、「日常の姿」の良さを伝える。

・ 一般の人にわかりやすい記述で。

・「ふるさと創造学」の学術的文脈を平易な言葉で表現し、知識人が見ても納得、共感できるように。＝学術的な転倒のない記述で。

※ 一般に教育実践として生じる矛盾（例えば「人間教育は学力優先ではないが、学力テストの結果も重要」など）を同時に発信すると、見識ある人々の信頼を得られない。発信の態度として、教育ビジョンを実践していくうえで起こる矛盾を「多様な価値観をもち、それぞれの立場で試行錯誤して意見を交わしながら変化し続けている方々の姿」として、ありのまま肯定的に、ゆるい姿勢で示していく。

・ 新年度から始まる教育ビジョンの実践にかかわる各現場の調整業務と並行してエピソードを集め、記事に起こしていく（現場への資料作成依頼は想定していない）。

●予定

３月中に業者選定、制作イメージ固め → ４月以降に順次稼働。

「ふるさと創造学」の定着とともに英訳発信の可能性も検討。

参考イメージ　福島市教育委員会刊行の冊子

「福島に暮らしてよかった」 誇りを見直す冊子「板木」創刊

The Huffington Post | 投稿日: 2013年09月10日 13時20分 JST | 更新: 2013年09月11日 15時33分 JST

福島の温故知新を伝える小冊子『板木』　木下真理子

12 シェア　33 ツイート　5 Bookmark　0 メールアドレス　3 コメント

メルマガ登録:
メールアドレス　メルマガ登録

フォロー: バンギ, ライフスタイル, 小冊子 板木, 東日本 福島, 東日本大震災, 東日本大震災 復元, 板木, 社会, 福島, 福島 小冊子, 福島 板木, 福島市, 福島市 板木, 福島市教育委員会, 震災 復興, 震災復興, ニュース

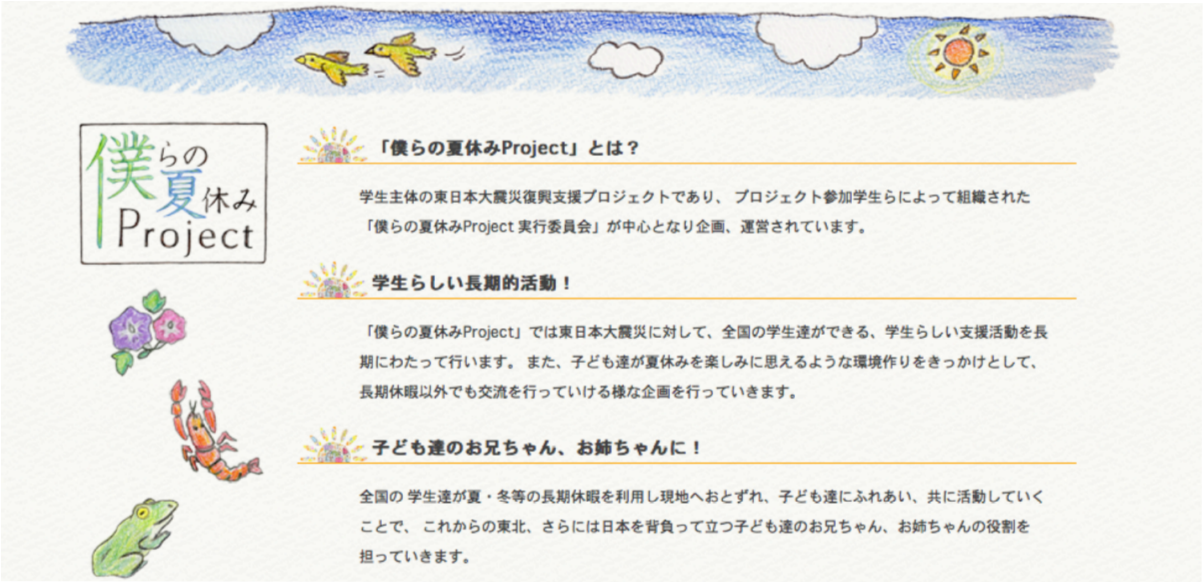
安齋さんは、地元でフリーペーパーの編集長を長年務めていた同市在住の木下真理子さんに編集を依頼した。当時、木下さんは震災の影響などで編集業から身を引くことを考えていたが、安齋さんの情熱とその依頼内容に「久しぶりにワクワクしたから」と編集長を引き受けたという。

木下真理子

テーマは「福島で伝える温故知新」

「民家園では、詳しい知識を持つボランティアさんの協力のもと、昔の人々がお盆や節分などの年中行事をどのようにおくっていたか、再現するイベントを行っています。異動後それに参加するようになり、初めて知ることだらけで感動したんですね。年中行事を通じて、昔の福島の人々が知恵や知識を使って自然をうまく生活に取り込んでいたこと、自然と共存していたことが分かったんです。そこで、気軽に外で遊ぶことが難しくなってしまった今だからこそ、すばらしい文化やこの施設を大切にしたいという思いが芽生えました」

木下真理子

『板木』は伝えるための昔の道具の名前

参考イメージ　大学生ボランティアによる被災地活動のホームページ